

## 「少子高齢化による労働力不足は日本人だけでは賄えないの ですか？」

平成 28 年 3 月 22 日

### ●さっしさんからの質問

少子高齢化による労働力不足を外国人労働者で賄うことは、断固反対です！本当に日本人だけで賄うことは不可能なのでしょうか？

### ●西田昌司の答え

移民については、私は絶対反対です。労働力不足を補う目的で移民を受け入れたとしても、彼らは日本で家族を作って子供も産みますし、日本人に比べて多産な彼らの人口比がどんどん大きくなると日本社会との軋轢が生じて現在のヨーロッパ各国で起こっているような問題が必ず出てきます。そうになると外国人排斥を訴える運動が大きくなって社会が混乱しますし、治安が悪化して最悪はテロが発生する可能性もあります。自民党内でも移民を受け入れるような議論はされていません。

一方、少子高齢化によって総人口に占める生産年齢人口（15～64歳の人口）の割合が急激に減る事態に直面していますし、労働力不足をどうやって解消するかという問題もあります。現在、日本には技能実習制度という制度があり、発展途上国の外国人を受け入れて期間限定（従来は最長3年であったが、平成27年3月6日の閣議決定により5年に延長）で日本で技術を習得し、母国に帰国後は習得した技術を生かして母国の発展に貢献していただくことを目的としています。結果的に労働力の補填にもつながるという面もあります。しかし、そのようなやり方は結局は弥縫策にしかありませんし、根本的な解決にはならないことは言うまでもありません。

最近、「保育園落ちた日本死ね!!!」と題した匿名のブログが大いに話題になっているようですが、現在の少子高齢化の一番の原因は「東京一極集中」にあると私はずっと訴えています。首都圏に人口やビジネスが集中していますが、首都圏で子育てをしようにも保育所は不足していますし子育てをするには大変な環境ですから、東京一極集中が進むほど少子化に拍車がかかるのは当然と言えます。その一方で、地方では定員割れの保育所が沢山あると聞いています。東京一極集中を解消して地方に住んでも仕事に困らずにゆったりと生活できるとなると、地方で子育てをしたいと思う若者が沢山地方に移って子供も沢山産まれるでしょう。東京一極集中を解消すれば少子化問題も自然となくなるはずです。

しかし、すぐにはそうはなりませんし、今から子供が産まれたとしても働き手になるにはやはり時間がかかりますので、その間の労働力不足をしのぐには外国人の受け入れも一つの考え方だと思います。但し、彼ら外国人が不法に滞在することのないようしっかりと管理しなければならないのは言うまでもありませんし、滞在期間を決めて期限が切れる前に必ず母国に帰っていただくような仕組みを考えなければいけません。間違っても彼らが日本で子供を産んで住み着くようなことがあってはなりませんし、外国人労働者受け入れはあくまでも弥縫策であることは強調したいと思います。

この少子化問題については、自分が儲かりさえすればよいという「経済至上主義」が少子化の遠因であるという気がしますし、日本人は大切にしなければならぬ大事なことをどこかに忘れてしまったのでは、と考えられるのです。日本人が大切にしなければならぬのは「自分の故郷ふるさとを大切に守りたい」というところだと思いますし、例えば企業経営者であれば、利潤を追求して東京に出るのではなく自分の故郷ふるさとで雇用の機会を人々に与えたい、と考えるところが一番大切ではないでしょうか。

私の地元の京都では割とそういった考えの企業がありますが、その中の一つである『グンゼ』という会社を今回紹介します。『グンゼ』は皆さんもご存じの通り男性用肌着・インナーを主とするメーカーですが、元々の社名は

漢字で『郡是』と書きました。創業者の波多野鶴吉さんという方が、彼の故郷の丹波国何鹿郡綾部町（現・京都府綾部市）に蚕糸業の振興を目的として設立したのがこの会社です。

波多野鶴吉さんは、故郷に事業を起こして人々の所得を上げたいとの思いで『郡是』という社名を考えたのですが、そのような会社ですから上場会社となった現在でも本社を東京には置いておらず（本社は大阪市）、本店は今でも綾部市に置いています。『グンゼ』のお陰で綾部に雇用が生まれていますが、それだけでなく他の産業の雇用にもつながっており、『グンゼ』の創業から100年が経過した現在もずっと綾部に恩恵を与え続けて来ています。このように京都には、故郷を大切にしたいという思いから東京には進出せずに頑張っている企業が割とありますし、そのところが千年の都としてここまで続いてきた京都の原動力にもなっているように思います。

京都だけでなく、他の地域もこのように故郷を大切にすることをすべきですし、この原点をしっかりとところにとどめた上での、弥縫策としての外国人労働者受け入れの議論をすべきだと考えています。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>